

奨励研究 研究報告書

研究課題

室町文化に関する基礎的研究―「東山文化」再検討―

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 非常勤講師

家塚 智子

はじめに

一五九〇年代に成立したと言われている長谷川等伯の談話の聞書『等伯画説』には、

東山殿二百カザリ有之、一切ノ唐絵ト云唐絵、并見事ナル物ハ、皆東山殿ノ御物也、とある。今日にいたるまで、室町將軍家伝来の唐物・唐絵（以下唐物と略す）は、「東山御物」として非常に珍重されている。室町時代、將軍家周辺では、『室町殿行幸御膳記』『小河御所並東山殿御膳記』『君台觀左右帳記』、あるいは御成記などに記されているように、殿中を唐物で飾った「唐物荘嚴」（一）の世界が嗜好された。これらは美術工芸品であると同時に、將軍の権力を誇示するための道具・装置でもあった。

竹本千鶴氏（二）によると、「東山御物」という語の初見は、天正十六年（一五八七）の奥書がある『山上宗二記』であるという。

今日、室町文化や同朋衆として一般的にイメージされる像は、十六世紀末頃から現代に至るまで繰り返してきた、所謂「東山文化」への回帰運動のなかで、次第に創り上げられていったといえる。それは、何故、室町幕府八代將軍の足利義政の治世下、あるいは義政自身、そして同朋衆に、茶道文化をはじめとする、様々な文化的事象の出発点を求めなくてはいけなかったのだろうか。

#### 一 「東山文化」をめぐる言説について

「東山文化」をめぐる研究史については、すでに末柄豊氏（三）によって、詳細でかつ的確な整理がなされている。また、川嶋將生氏（四）は、「東山文化」という言説の成立について考察されている。氏によれば、所謂、日本史の辞典に、「北山文化」「東山文化」が立項されるのは、一九六六年に刊行された『角川日本史辞典』が最初であるという。実は新しい語であることに驚かされる。

ところが、ここ三十年位の間に、永島福太郎氏（五）、村井康彦氏（六）、川嶋將生氏（七）から「東山文化」については疑問が提示された。それぞれの特徴としてあげられた事象を詳細に見ていくと、三代將軍義満の「北山文化」の時期と八代將軍義政の「東山文化」の時期の間に位置する四代將軍義持・六代將軍義教の時期というのが、より重要な意味合いをもつ場合が少なくないという見解である。このような議論が展開されるなか、一九七六年、根津美術館、徳川美術館にて開催された『東山御物』展によって、「東山御物」の位置づけについて見直しがなされた。（八）これまで、「東山御物」とは、おもに中国渡来の陶磁器や漆器などの美術工芸品を唐物、絵画を唐絵を称し、足利義満以来の収蔵品、義政自身の収蔵品からなるといわれてきた。そのうち、唐絵には「天山」「道有」「雑華室印」など鑑蔵印が押されている。「天山」「道有」は足利義満の鑑蔵印である。ところが、足利義政のものとされていた「雑華室印」という鑑蔵印が、足利義教のものであったことが判明した。「東山御物」と称されてきたものは、従来のように義政によって収集されたものではなく、大部分が義教によって収集されたもので、それを義政が継承したことが明らかになった。「東山御物」がもつイメージを改めなくてはならなくなったのである。

近年、末柄氏の研究が発表されたこともあり、「北山文化」「東山文化」と分けて考えるのではなく、「室町文化」と定義づける方が妥当であると、認識されはじめ、市民権を得つつある。（九）

しかし、筆者は、もう一度、室町文化における「東山文化」の位置づけとその概念に着眼したい。義教期の事象であったとしても、後世の人々は、それを義政期のこととして、認識し評価してきたということに、もう一度注目したい。足利義政の時代を注目し、更には憧憬する風潮は、実は十六世紀末にはあった点は、「はじめに」で述べた通りである。

明治二十年代に岡倉天心が、大正初期に笹川種郎、原勝郎、内藤湖南が、昭和十年代～二十年代に森末義彰、芳賀幸四郎が、そして、一九五〇年代に林屋辰三郎（一〇）というように、大きく社会が動こうとするとき、なにか「日本的」なものを見出そうとし、それをよりどころにする際、「東山時代」、そして「東山文化」を議論の俎上に持ち出してきたことを鑑みると、あながち、「東山文化」のもつ求心力というものは看過できないのではなからうか。否定するのは簡単であるが、既往の「東山文化」の求心力

というものを、きちんと評価する必要がある。

## 二 將軍家の御物と倉の管理

後世、「東山文化」を「古典」として「理想」にしたのかという問題に踏み込んでいく上で、ひとつの手がかりとして、將軍家の御物の受容に着目する。ここで注目したいのが、公方御倉と倉を管理する人の関係である。

幕府経済の不振のため、寺社修造や仏事の費用調達には公方御倉の御物が払い下げられていた。当時、公家であっても武家であっても、財産を寺院や土倉に預けておく習慣があり、將軍家も独自の財産管理機構を持たず、公方御倉に委託していた。佐藤豊三氏は、寺院の「御成の献物は単なる祝儀物ではなく、幕府・將軍家歳入としての財源的意味を持っていた」とされる。(11)そして、桜井英治氏(12)によると、「御物」が売却されることを「売物」、あるいは「代物」と称するが、実際は売却よりも「物納」の方が圧倒的に多かったという。

ここで注目したいのが、応永年間に登場する金阿弥、式阿弥の兄弟である。金阿弥は応永十二年(一四〇五)七月、遣明船に乗って明に渡り、翌年帰国した。(13)そして、『教言卿記』応永十三年閏六月九日条に、

北山殿の御倉預ハ式アミ云々、金阿ミ之弟也、

とあるように、金阿弥が入明の間は、弟の式阿弥が「御倉預」を務めており、本来は、金阿弥が「御倉預」の職にあつたものと思われる。『教言卿記』応永十三年八月四日条に、

仙女絵、金阿に尋意之処、日本近日書タル絵云々、

とあることから、一条烏丸に住み「墨絵通世者」(14)とも呼ばれた金阿弥は、絵画の鑑定もしていたのである。貿易品や質物における重要品目である唐絵、唐物を鑑定する鑑識眼は、不可欠であったといえる。金阿弥のように、唐絵、唐物の鑑定の依頼を受けるものも、土倉の中には多くいたと思われる。(15)さらに、興味深い点は、金阿弥が「仙女絵」に対し、「日本近日書タル絵」と回答したことである。おそらく、唐絵については、実際に、「日本で」描かれた「唐絵風」の作品も多数あつたのかもしれない。そうしたことをこの史料は物語っているともいえよう。(16)

桜井英治氏(17)が紹介された、足利義満のころ、現銭の支出やのちに御倉奉行粉井がなうことになる進物の保管なども担当した善阿弥(18)や、このあとを継いだ(19)「公方銭奉行」一阿弥(20)にも注目できる。今後は、公方御倉との関係に留意しつつ、通世者系の倉の存在を想定し、考察することもある必要だといえる。そのひとつの類型として、金阿弥、式阿弥、そして善阿弥、一阿弥のような、阿弥号を名乗り、倉を管理したもの、さらに金阿弥のように鑑定もし、絵も描いたものがいたことを、ここで確認しておきたい。この倉の管理こそ、のちに同朋衆の職掌のひとつとして、重要視されていくのではなからうか。

山本泰一氏(21)は、従来、河原者の善阿弥の鑑蔵印であろうとされていた「善阿」印は、足利義満に近く仕え、幕府の財産の保管、出納を任された善阿弥が管理した倉、善阿倉に保管された幕府所有の唐絵に捺された鑑蔵印と指摘されている。義満期の善阿弥については『山上宗二記』でも確認することができる。つまり、『山上宗二記』の善阿弥と桜井英治氏が紹介された善阿弥と同一人物であるといえる。

このように、同朋衆の前身として、倉の管理を任された通世者の存在を重要視する必要がある。この点については、今後の課題として、さらに史料を蓄積し、考察しなくてはいけない。

## 三 『君台観左右帳記』の受容と付加価値の発生

竹本千鶴氏(22)は、『君台観左右帳記』の書写一覽を作成され、永正・大永年間に特に集中して、大名や茶人をはじめ様々な人びとが『君台観左右帳記』を所持、あるいは書写したことを明らかにされた。本来、『君台観左右帳記』の奥書には、伝授された者以外には見せてはならないという、文言が書かれており、秘伝書の意味合いをもつ。しかし、実際には、多くの写本が書かれているのである。その理由と

して、矢野環氏(23)が指摘されているように、幕府の弱体化に伴い、同朋衆が『君台観左右帳記』の伝授を行い、それと引き換えに金品を受け取っていた。まさに源城政好氏(24)のいう地方武士との間で「文化と経済の交換」が、ここでも行われていたのである。こうした『君台観左右帳記』の受容の背景には、桜井英治氏(25)が指摘されているように、義政期から將軍家の「御物」が散逸したことも挙げられる。

唐物に付加価値を生じさせるということで言えば、相阿弥の代付も挙げられる。『蔭涼軒日録』の記主亀泉集証から、頻繁に相阿弥は代付を依頼された。(26)

また、大徳寺の『真珠庵文書』には、正文三通と案文一通のあわせて四通の相阿弥の代付折紙が収められている。末柄豊氏(27)によって詳細に検討されている。

明応二年(一四九三)四月、細川政元によるクーデターである明応の政変の勃発と常態化する室町幕府の分裂状況では、五山禅院を含む將軍家周辺に蓄積された唐物・唐絵の拡散を招いた。また、応仁・文明の乱以前までは守護は在京が前提だったが、乱後には守護の領国への帰国、在国が顕著になった。帰国した守護たちは、公家の疎開と相まって、京都で養い身につけた文芸・芸能・教養などを、自国に広めたのである。所謂「小京都」の成立である。そこには唐物・唐絵の新たな需要を喚起したことであり、そのようななか、相阿弥の代付というのは重要な意味をなし、「東山殿」のイメージとの一体化し、新たな付加価値を生むことになったのである。

#### まとめ

応永八年(一四〇一)、第一次遣明船の派遣によって、陶器、漆器、絵画など、唐物・唐絵に対する憧憬に拍車がかかった。そして、『室町殿行幸御傍記』『小河御所並東山殿御傍図』『君台観左右帳記』や御成記などによって、唐物・唐絵が室町將軍邸のみならず、武家の邸宅を飾っていた様子を知ることができ、一方で、將軍御成の献物は単なる祝儀物ではなく、幕府・將軍家の歳入としての財源の意味を持っており、將軍家に献上された莫大な品物は、同朋衆らの手によって、將軍家の「御物」と換金用の品物に分けられた。さらに時代が下ると、例えば、同朋衆の相阿弥の代付に付加価値を見出すにいたった。そして、『等伯画説』に著されているように、見事な唐絵・唐物はすべて「東山殿の御物」、つまり足利義政の所持品であると認識されるにいたったのである。

このような価値観が生まれる過程において、今日、一般的に言われているような「東山文化」という概念が芽生え、「東山文化」を「古典」として「理想」としたのである。

#### 註

- (1) 久保智康氏は、「莊嚴」という語が本来的に仏堂の裝飾を意味することをかんがみると、(中略)「唐物室礼」とすべきであろう」と指摘されているが、ここでは、従前通り、「唐物莊嚴」としておく。久保智康「新安沈船に積載された金属工芸品―その性格と新安船の回航性をめぐって―」『九州と東アジアと考古学―九州大学考古学研究室五〇周年記念論文集―』(二〇〇八年)。なお久保氏からは、本課題と関連して、唐物の受容について、数々のご教示を賜り、「唐物」という語句の定義づけを含め、再検討するようご指摘をいただいた。
- (2) 竹本千鶴「名物茶器の史的変遷」『織豊期の茶会と政治』思文閣出版(二〇〇六年)。
- (3) 末柄豊「室町文化とその担い手」(榎原雅治『一揆の時代』日本の時代史11 吉川弘文館(二〇〇三年))。
- (4) 川嶋將生「東山文化―その言説の成立―」『アート・リサーチ』7(二〇〇七年)。
- (5) 永島福太郎『茶道文化論集 上巻』(淡交社(一九八二年))ほか。
- (6) 村井康彦『日本文化小史』(学芸書林(一九六九年))、『乱世の創造』(日本文明史 第五巻 角川書店(一九九一年))ほか。

- (7) 川嶋將生「足利義教とその文芸」(『中世京都文化の周縁』思文閣出版 一九九二年)。
- (8) 『東山御物』(図録 根津美術館・徳川美術館 一九七六年)。
- (9) 川嶋將生氏は『室町文化論考―文化史のなかの公武―』(法政大学出版局 二〇〇八年)の序で「室町文化」と冠した経緯を述べられている。
- (10) 熊倉功夫氏は、民衆文化論が、朝鮮戦争、サンフランシスコ平和会議に至った一九五〇年代という歴史学にかけられた政治的課題に応じるかたちで議論され、同時に、戦前における文化史学への反省として登場したものであったと指摘されている。(熊倉功夫「茶道史研究と民衆文化論―戸田勝久氏著『武野紹鴎研究』を読む―」『藝能史研究』三二号 一九七一年)。
- また、村上紀夫氏は、「一九五〇年代と林屋史学」において、一九五〇年代、林屋辰三郎氏を取り巻く社会状況を踏まえた上で、「林屋史学」の成立過程を考察され、当時の社会状況と直面する課題と向き合うなかで「発見」されたもので、約半世紀経過した現在、いかに評価するかは現代の研究者に投げかけられた課題であると問題提起をされている。(村上紀夫「一九五〇年代と林屋史学」『藝能史研究』一八三号 二〇〇八年)。
- (11) 佐藤豊三「將軍家『御成』について」四『金鯨叢書』第四輯 一九七七年)。
- (12) 桜井英治『室町人の精神』(講談社 二〇〇一年)。
- (13) 『教言卿記』応永十二年七月二十六日条、応永十三年閏六月十日条。
- (14) 『教言卿記』応永十三年四月二十一日条。
- (15) 佐藤豊三「將軍家『御成』について」四『金鯨叢書』第四輯 一九七七年)。
- (16) 史料の解釈にめぐっては、羽田聡氏よりご教示を賜った。
- (17) 桜井英治「御物」の経済―室町幕府財政における贈与と商業―(『国立歴史民俗博物館研究報告』第九十二集「共同研究」日本における都市生活史の研究 古代・中世の都市をめぐる流通と消費―二〇〇二年一月)。
- (18) 『永助法親王記』応永九年五月二十日条、二十一日条、『辰市家日記』応永十二年五月晦日条(東京大学史料編纂所所蔵影写本)。
- (19) 『兼宣公記』応永十一年二月二十四日条「善阿跡一阿下行之」。
- (20) 『春日社臨時御神楽之記』(東京大学史料編纂所所蔵影写本)。
- (21) 山本泰一「足利義満時代の善阿弥と鑑蔵印について」(図録『室町將軍家の至宝を探る』徳川美術館 二〇〇八年)。
- (22) 竹本千鶴「織豊期の座敷飾りと「大名茶の湯」」(『織豊期の茶会と政治』思文閣出版 二〇〇六年)。
- (23) 矢野環『君台観左右帳記の総合研究』(勉誠社 一九九九年)。
- (24) 源城政好「地方武士の文芸享受」(村井康彦編『公家と武家』思文閣出版 一九九五年、のちに源城政好『京都文化の伝播と地域社会』思文閣出版 二〇〇六年)。
- (25) 桜井英治「中世の贈与について」『思想』八八七 一九九八年)。
- (26) 家塚智子「相阿弥再考―文献史料にもとづいて―」(『野村美術館研究紀要』十二 二〇〇三年)。
- (27) 末柄豊「相阿弥の代付折紙について―『真珠庵文書』から―」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第四〇号 二〇〇八年)。

